

榊原功一 提出 学位申請論文（課程博士）

『縄文時代の集落構造と世界観

— 竪穴住居型式研究を中心に —』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、序章にはじまり、第Ⅰ章から第Ⅶ章および終章の9章構成である。序章に議論の目的と概要を述べる。

第Ⅰ章竪穴住居型式論では、時期、地域毎にさまざまに変化する竪穴住居形態の型式について検討する。まず竪穴住居研究の学史を振り返る。そして、小林謙一、林謙作の研究におけるいくつかの課題を抽出した上で、住居平面形、柱穴の本数、炉形態と位置などから論者自らの住居型式を設定する方針を明らかにする。続いて、環状集落における分節構造を通して、住居型式と集団を論じる。

第Ⅱ章地域論では、甲府盆地や伊那谷における縄文集落の変遷と画期について検討する。とくに遺跡分布・遺跡数と住居数の変化、集落の継続性を分析し、集落の立地の変化と生業活動にまで論及する。また、竪穴住居の構造の変遷を辿り、大きく早期型、前期型、中期型、後・晩期型を区別する。とくに中期末の敷石住居から後期の方形周石住居の出現と終末を見究める。さらに、屋内埋甕などの住居内の特殊施設、住居の規模と大形住居そして土器捨て場の形成を問題とする。なお集落の変遷については精神生活面での変化、他地域との交流、土器の生産と流通、自然災害、気象変化、景観などの多様な分野をも視

野に入れている。

第Ⅲ章縄文中期後半への視点では、集落あるいは竪穴住居に関する直接的検討から眼を転じて、土器様式とのかかわりに視点をおいた論考となる。これによって集落をとりまく自地域および他地域との関係などが明らかにされる。その上で、井戸尻期～曾利期の住居形態を具体的に検討し、さらに縄文中期後半の竪穴住居の変遷を概観する。

第Ⅳ章集落構造論では、住居型式の分布から縄文中期に特徴的な環状集落の集落構造を探る。論者が最も力をこめて独自の分析を展開していることがよくわかる。まず、竪穴住居の屋根について考察し、通常茅葺と推定されているのに対して、廃絶竪穴の床面上の第一次堆積土や消失住居に遺存する炭化物のあり様から、むしろ土葺であったと推定する。そして、竪穴住居は冬の家、掘立柱住居が夏の家であるという季節性を問題とする。

次に、環状集落が安定した大規模な集落とみる大方の仮説に対し、土井義夫、黒尾和久による小集団の頻繁な回帰と関係づけ、「縄文モデル村」のごとき景観を否定する仮説を対置して検討し、論者は環状集落景観を支持する。つまり、住居型式配置パターンを分析して、興味深い議論を展開する。住居型式をAからG型式に7分類し、支柱配置によってⅠ、Ⅱに細別する。それらの型式が環状集落内に分布するパターンを中期あるいはおよび後期の4遺跡で分析して、環状パターンAにおける同一型式対置と不規則配置、および環状パターンBの同心円的分割と円周上の分割の存在を浮かび上がらせる。ともに分節構造をなし、いくつかの住居型式からなる小群に注目する。その内容

は、単位数が2単位からなる場合、環状パターンAとなり、多い場合には環状パターンBとなるとする想定1を予想する。環状パターンAにおける1大群が、環状パターンBの1小群に対応し、この原理は両パターンに共通し、集落を構成する単位数に応じて環状パターンに違いを生じたとするのである。これに対するに、集落全体の2分割を重視すると、2大別の各大群中に住居型式ごとに分節的に配置したのが環状パターンA、各大群内に住居型式の組合せを1単位とする小群を配置したのが環状パターンBとなる想定2を予想する。これによって、集落の大小、住居数の多寡にかかわらず、環状集落が2大群構成を原則とすることを提示する。そして双分組織に対応するものであろうとする。

さらに、環状パターンの1単位（小群）が何を意味するのか深く踏み込んでゆく。その解決の緒を廃屋墓5例に求め、少なくともA型式には夫婦と子供、またC型式の1例は夫婦という家族構成を復元する。したがって、基本的なA・C型式住居は、夫婦と子供という小家族（核家族）を示すものであり、D～G型式の支柱穴の多い住居型式については、2～3世代の同居大家族と想定する。

そして二大群に反映される双分組織について民族誌の実際から、その意義を考察する。

また、集落形態が社会組織と関係する意味のほかに、もう一つ重要な縄文人の世界観を議論する。具体的に4集落遺跡の分析を通し、炉の平面形と柱穴配置、竪穴の平面形の類似性の存在は、まさに縄文人の意識の反映と考える。単なる個人的な思いつきではなく、民族学的

調査研究に眼配りし、その妥当性を探ろうとする努力が良く示されている。

第V章住居空間論においては、まず屋内貯蔵穴に注目する。中期前葉初～中期後半初に存在し、出現期、確立期、盛行期、衰退期が区別される。その機能、意義を一概に判断し得るものではないが、①定住性とのかかわり、②冬越しのための保存食料の貯蔵、③住居人数の増加と保存食への依存度の高まり、④各竪穴の独自性、経済的自立性、⑤集落構造の分節に対応、連動した竪穴空間の分節化、などの可能性を考える。また、その消滅については①集落の断絶、②貯蔵専用の建物への引継ぎ、③炉の大形化にともなう狭隘化、④貯蔵用の大形長胴甕の登場、⑤掘立柱建物の確立などが関連するものと予想する。

また、空間認識のもう一つの課題を竪穴住居の空間区分を検討しながら、廃屋墓12例を分析する。そこに住居内の配置、柱穴との関係そして埋葬人骨の頭位、性別などが区別されていた可能性を指摘する。さらに一般的な埋葬である土坑墓や北海道の周堤墓の葬位、頭位方向などから廃屋墓についても論及する。

そして、竪穴住居の空間区分について、①石皿・台石、②石棒、③立石・石柱、④丸石、⑤黒曜石貯蔵ピットの5項目について左側男性、右側女性の区分とともに②・③～⑤を男性、①を女性区分の指標とみる。男女2分化のほかに奥壁の祭祀空間や、左右の聖俗という問題にまで論及する。

第VI章敷石住居系譜論では、中期末に出現し、後期前半に盛行した「柄鏡形住居」を地域・時期を視点に多角的に検討する。その一つが

壁柱構造の問題である。また柄のない敷石住居を「敷石住居」、柄をもつ敷石住居を「柄鏡形敷石住居」、敷石をもたずに柄をもつ住居を「柄鏡形住居」と区別すべきと提案する。また、柄鏡敷石住居が、それまでの住居が南に向くのに対して、方位は関係せずに地形の傾斜に沿って構築することとなるところに世界観の転換を垣間見ようとする。なお出入口を斜面下方に向けるのは、雨水の浸入を防ぐためとする考えを示す。

第Ⅶ章敷石住居空間論では、礫の敷設状況、無敷石部の分析から空間デザインの存在を説明し、さらに①敷設方向、②敷石間の隙間、③区画状の礫、④礫の大きさ、⑤敷石のレベル、⑥石材、⑦敷石面の磨き、⑧敷石を欠く空間を通して、空間利用を推論している。さらに敷石住居の石材について、山梨県地域と多摩川流域を比較分析して、共通点および相違点を見出している。

掉尾の終章住居型式研究の展望では本論の内容を改めて整理しながら要領良くまとめて今後の研究を展望している。

論文審査の結果の要旨

縄文時代の一般的住居形態である竪穴住居は、縄文時代の社会文化はもとより、世界観にかかわる極めて重要な存在である。論者は、この課題に真正面から取り組みさまざまな角度から検討している点が高く評価される。議論を展開するに当っては、まずは竪穴住居をA～G型式の7分類し、柱穴配置、炉の形態などに注目し考察を進めてい

る。検討課題毎に地域性と時代性を確認することから始め、叙述に一貫する筋を通しての重要である。その型式分類も考古学的手法を忠実に踏まえ、あいまいさを払拭して説得力がある。それ故、そうした揺るぎない型式分類を踏まえて、自らの仮説に基づく堅実な論理の組み立てを約束するものとなっており評価される。この型式分類において平面形態にとどまらず柱穴、炉のあり様を視野に入れて検討しようとするところは重要であるが、それだけで十分であるかどうか、改めて吟味が加えられる必要がある。住居は柱によって立体構造をつくるものであり、そうした柱と桁、梁、壁などの要素との関係が検討されなければならないのではないだろうか。

住居内の空間区分についてとくに屋内貯蔵穴の有無の地域的、時期的な変化を見極めた上でその出現の過程を柱穴の2間形と関連させ集落の継続性や炉の変遷などの諸事象とかがかわるとする。貯蔵穴が食料に関係するであろう蓋然性を予想して、女性原理の象徴を嗅ぎとり、住居内の右側に位置する傾向の強い時期があることに関連させて、左右2分割において、右が女性、左が男性という空間区分を提案したりするのは、独創的である。しかし依然として根拠は磐石とはいえないが、空間の分割、左右、男女の対立などに関連させる問題、さらに左右の聖空間としての性格の区別を読みとろうとすることなどは、これまでの研究には殆んどみられない新しい問題提起として重要であり、今後のさらなる展望が期待される。

これまでも、環状集落に関する議論は活発に行われてきてはいるが、依然として大方が納得すべき見解に至っていない。論者が改めて

この問題に取り組み、環状集落が繰り返し回帰した小人数の集団の結果の単なる累積であるとする仮説を俎上にものせて、それが見た目に捉われた観方であり、単なる時間的な痕跡の蓄積の結果ではなく、社会組織上の構造原理を反映した形態であると主張するのは重要である。その上で集落構造の2大群と分節構造への分節へと言及しているのは今日の集落論の一定の到達点を示すものとして評価される。

また住居の柱に注目するのも独創的であり、上屋の構造だけでなく、また床面積の大小に関連するだけでなく、住居型式そのものを体現し、型式間に対照的な関係を象徴しながら環状集落内の分布のあり方に分節構造をとるものであることを導き出す。つまり住居の小群が同心内、内周上配置において2大群を構成し、2分割構造による双分組織との関連性に注目する。こうした住居型式の対照的なあり方は、環状集落の2大群分節構造の関係をみてとる仮説は双分的社会組織のみに限定されるのではなく、異なる両者の事実は「入れ子」構造を示し、世界観と不即不離のかかわりとするのは重要かつ注目すべき提言である。縄文のいくつかの事象に潜在する世界観に「入れ子」構造を見てとる視点は、竪穴住居穴や環状集落だけでなく、さらに環状列石および土器文様の空間にも見出しうる豊かな発想として評価される。

同様な視点で、土器文様について、突起の数や文様要素の単位の数を柱穴数とのかかわりの一環として大胆に読み取ろうと試みているが、具体的に把握するには充分ではなく、さらなる検討が必要とされる。

集落は、単なる住居の集合あるいは寄り合いではなく、社会組織ひ

いては世界観と密接にかかわる。この視点に立って展開する議論は、
竪穴住居を対象とする考察と本論において双璧をなすものである。竪
穴住居の配置が二大群を以って構成する指摘自体は宮坂英式をはじめ
とするこれまでの研究にも見られるものであるが、この二大群の分節
だけではなく、さらに住居型式と貯蔵穴、住居内の施設および床面に
遺存する遺物の種類や組合せをはじめとする異同をも視野に入れた複
数の要素のあり様を分析してその実体を抽出し、双分組織を想定する
のは模範的である。とくに従来の集落空間の2群の分節構造を双分制
と関係づけるだけではなく、住居型式に認められる対立性を積極的に
関係づけて世界観を表象する「入れ子」構造であるとする発想は従来
の双分原理論には絶えてみることのなかったものであり、傾聴に値す
る。但し、住居の形態および集落の形態にとどまらず、環状列石や土
器文様の空間にまで共通する性質を見出し、それが、相互に入れ子構
造になっている事実を指摘することにおいて、若干の検討すべき問題
が残されているのではあるまいか。つまり、入れ子構造が形態上の形
態にとどまらず、縄文人の認識の次元あるいは、縄文人の世界観にお
いてその入れ子構造がかかわってくる意味の評価をより明確にするに
足る説明がさらに求められるところを残す。つまり世界観の実体を把
握することは困難であるが、少なくとも各種事象の共通性に「入れ子
構造」を数え上げるにとどまらず、二項対立の世界観に止揚すること
が必要と考えられる。たしかに本論中に触れるところがあるものの、
より高次の認識の次元における理解によって、さらに集落のウチ・ソ
ト、住居のウチ・ソト、土器のウチ・ソトあるいは直交する墓坑主軸

の二者などに象徴される、多岐に亘る縄文人の認識の世界への接近がより浮かんでくることが期待される。

総じて、本論はこれまでに取り組みがなされてきた竪穴住居および集落構造の研究を独創的な視点から一段と推進したものと高く評価される。したがって本論文提出者の櫛原功一は博士（歴史学）の学位を授与される資格を有するものと認められる。

平成23年2月18日

主査 國學院大學大学院客員教授 小林 達 雄 ㊞
副査 國 學 院 大 學 准 教 授 谷 口 康 浩 ㊞
副査 早 稲 田 大 学 教 授 高 橋 龍 三 郎 ㊞